

《新刊紹介》

天野太郎監修 『阪急沿線の不思議と謎』
『南海沿線の不思議と謎』 『近鉄沿線の不思議と謎』
実業之日本社(じっぴコンパクト新書)

小 針 誠



現在40代よりも上の世代であれば、阪急、南海、近鉄というと、鉄道路線とともに、プロ野球の球団やその白熱した試合風景に思いを馳せる人も少なくないだろう。

若い世代の学生諸姉のために、ごく簡単に説明をしておくと、かつて阪急、南海、近鉄といった関西私鉄はプロ野球球団(いずれもパシフィック・リーグ)を有していた。この3球団に、セントラル・リーグに属する阪神タイガースを加えると、関西には、私鉄資本による4球団が集中し、「プロ野球のメッカ」だったのである。

しかし、阪急、南海、近鉄は今日、プロ野球球団をもたない。1988(昭和63)年に阪急ブレーブスはオリックスへ、南海ホークスはダイエー(2005年以降はソフトバンク)へとそれぞれ売却譲渡された。大阪近鉄バッファローズは2004(平成16)年の球界再編で解散した。現在の在阪球団といえば、阪神とオリックスのみで、それ以外は関西を離れて久しい。

関西の私鉄資本の阪急・南海・近鉄は、プロ

野球に限らず、ほぼ共通して、沿線に大型住宅地やマンション(阪急:池田室町, 南海:林間田園都市や狭山ニュータウン, 近鉄:学園前住宅地や登美ヶ丘住宅地など)を造成し、駅前には関連のスーパーマーケット、ターミナル(終着)駅には大型百貨店を併設し(南海は高島屋と業務提携)、スポーツ競技場や遊園地などの遊興・娯楽施設(阪急:宝塚ファミリーランドや宝塚大劇場, 南海:みさき公園, 近鉄:近鉄あやめ池遊園地や近鉄花園ラグビー場など)を設けた。阪急交通社、近畿日本ツーリスト、南海国際旅行など、旅行業に積極的である点も共通している。

鉄道利用を促進するために、大学や学校を沿線地域に誘致したり、校地目的の土地を売却してきたのも特徴的であった。ここ同志社・京田辺校地も、今からさかのぼることちょうど半世紀前の1967(昭和42)年に近鉄より購入した広大な敷地の上に建っている。

阪急は大阪梅田(キタ)から宝塚、神戸三宮、京都河原町方面を、近鉄は大阪上本町、京都、奈良、伊勢・志摩、名古屋と二府三県にわたる広範な地域を、南海は難波(ミナミ)から泉南、和歌山北部方面の沿線地域を、それぞれ自らの「陣所」とし、そのなかで様々な事業を興してきた。資本間の紳士協定があったのだろうか、決して他社の沿線地域を侵犯することはなかった。

つまり、私鉄は単なる輸送業を越えて、一大グループ企業として、それぞれの地域に根ざし

た多種多様な事業を手広く展開してきたのである。その傾向は、他地域、たとえば関東の私鉄資本に比べて、関西のそれのほうが顕著であり、より徹底しているように映る。

沿線に住む人々は、衣・食・住のみならず、学・働・遊といった生活のすべてを、鉄道網を含む沿線の資源に頼る(または頼らざるを得ない)環境を通して、それぞれの地域特有の沿線文化をつくってきた。普段利用している鉄道や沿線地域の様子、そしてそこに住まい暮らす人々の意識や行動こそが沿線文化のあり方を決定づけてきたのである。

そうした関西大手私鉄の沿線地域の歴史や文化をわかりやすく紹介した待望の書が刊行された。天野太郎・監修『阪急沿線／南海沿線／近鉄沿線の不思議と謎』という新書版の3巻本である。

一般に、鉄道路線や沿線地域というと、多くは沿線上にある有名な寺社仏閣や観光施設といった「点」にばかり目が向いてしまう。他方、鉄道好きならば、車両や駅に関心に注目するあまり、沿線地域やその文化に関心が向くことはないかもしれない。あるいは、沿線住民を含めた鉄道利用者にとっては、さして変化のない日常の風景に、特別な思いや関心を寄せることはまずないだろう。

それに対して、監修者は、列車や鉄道関連施設にとどまらず、「線」や「面」として展開される沿線の地域文化や歴史文化にまで視座を広げて注目すべきだと述べる。『〇〇沿線の不思議と謎』というタイトルにもあらわれているとおり、本書は鉄道の駅名や地名のルーツ、知られざる沿線地域にまつわるミステリーなど、約60のテーマを厳選し、いずれも簡潔明瞭に解説している。

評者(小針)は、本書3冊を手取るなり、いずれも一息に読んでしまった。既知のエピソードには、得意気になって「そうそう」と頷きつ

つ、未知の内容であれば、「へえ〜」と膝を打ちながら。

読後、本書の内容に刺激されるように、自身で現地を確認する小旅行に出かけてみた。すると、普段通勤で利用している列車や駅、そして日常の車窓の風景がこれまでとは明らかに違って見えてきたのである。それは毎日繰り返されるありふれた通学・通勤風景に大きな揺さぶりをかけられた衝撃的な体験であった。本書の内容を頭の中の知識にしておくだけでは実にもったいない。

しかし、もう一方で、関西私鉄やその沿線地域の行く末を案じたことも事実であった。昨今、少子化を主因とする人口減少や経済の構造変容を受けて、私鉄資本の関連事業も大きく変わろうとしている。2006年には阪急と阪神が一大ホールディングスグループ(持株会社)を結成するなど、私鉄資本の再編が進んでいる。先述のように、野球をはじめとするプロスポーツチームは売却譲渡や解散、遊興・娯楽施設のなかには閉鎖を余儀なくされたものも多い。

阪急ブレイブスの本拠地だった阪急西宮スタジアム(西宮球場)は大型商業施設「阪急西宮ガーデンズ」に、南海ホークスの大阪球場は都市型複合施設の「なんばパークス」に、大阪近鉄バッファローズが本拠地にしていた藤井寺球場の跡地は今では私立小学校(四天王寺学園小学校)の校地に生まれ変わった。近鉄花園ラグビー場も2015年には近鉄の手を離れ、東大阪市が所有・管理する「東大阪市花園ラグビー場」になった。

建物の外観も用途も大きく様変わりしたにも関わらず、その跡地に立つと、当時の面影、往年の選手のプレー、ウグイス嬢のアナウンス、辛辣ながらも愛情あふれるヤジや声援などを、郷愁のように思い出す向きも多いのではないだろうか。

『阪急沿線／南海沿線／近鉄沿線の不思議と

謎』は、実際に手にとった読者だけがその醍醐味を味わえる格好の道しるべの書なのである。

追記 2016年12月に、天野太郎監修『京阪沿線の不思議と謎』が刊行された。京阪沿線の住民としては、待望の書であった。あわせて味読に値しよう。